

仙台市青葉区 30代 男性 会社員



ボランティア精神の素晴らしさ

トラックいっぱいの物資を被災地に届ける友人

地震から数日たって友人から、缶詰類、お水、保存食等、何でも、少しでもいいから譲ってくれないかとの連絡がありました。

その夜、その友人が訪ねてきたので「大丈夫?」と聞いたら、「俺は大丈夫だけど、奥さんの実家が大変な状況らしい…」と。聞くと、その町は津波で甚大な被害を受けた町。ここ数日で可能な限り物資を集めて、現地まで物資を届けに出向きたいので、仲間で手分けをして物資を集めに回っているとのこと。

私は同行できませんでしたが、数日後、その友人がリーダーとなり、仲間数名と一緒に、水、缶詰類、ティッシュ、トイレトペーパーなどの食料・物資をトラックいっぱいに積み込んで、3時間かけて現地まで届けに行ったそうです。

無事届けられたことの報告、食料を譲ってくれてありがとうとの感謝もいただきました。

当時はガソリンの手配はもちろん、余震もまだあり、道路状況もひどいとき。友人とその仲間たちは、かなりの覚悟を持って向かったそうです。

その友人たちは今でも継続的にボランティア活動をしています。

こういうボランティア精神は短期間で持てるものではなく、常日頃から強い意志がある人間だからできることなんだろうと強く感じました。



東京都豊島区 50代 男性 大学職員



備蓄した水と食料、そしておにぎりを配布

全員が協力し合ってトラブルなし

これまでも大学では計画的に、飲料水と乾パン・ドライフードなどの食料をある程度備蓄してきました。ただ、帰宅困難者のことまでは想定していません。食料が足りるか心配しましたが、この日はたまたま食堂業者の人が学校に来ていたので助かりました。お米があるからおにぎりは作れる、と協力してくれたのです。

夕方5時頃から帰宅困難者の受け入れを開始すると、続々と校内に人が集まってきました。これからどれだけ人が増えるか分かりません。ひとまず学生を含めた全員に、水を1本とドライフードかおにぎりを配布することにしました。

今回、4500人もの人を受け入れましたが、驚いたことに、こんな非常時にも関わらず皆さん、順序良く列に並んでくれて、割り込む人や数をごまかす人はいませんでした。ここに来る途中で食事や飲み物を調達してきた人もたくさんいましたが、その人たちは「私たちは持っていますから」と水や食料を他の人のために譲ってくれたのです。

皆さんのご協力もあって、用意した水と食料は全員に行き渡りました。



立入禁止でも危機感なく

～ズボンの裾まくり水の中を自宅へ～

（諏訪市 30代 女性）

当日は、会社から帰って、水害で浸かったあたりで飲んでいました。会社から帰る時点で大雨だという連絡はあったんですが、飲みに行くころには普通だったので出かけていました。家に帰るときには、既に50センチくらい水が上がっていて、道路一面は海原のような状態でしたが、ズボンをめくって、わざわざその中を帰ったんです。帰る途中、マンホールの周りに「危ない」という標識が立っていたのはとても印象強く覚えています。その時点では水が透き通っていたから、そんなに危機感もなく帰りました。

考えてみると、家って人が絶対帰る場所なんですよ。今、携帯で当時の写真を見たら、立入禁止って書いてあるんですよ。でも、私はそれを越えて家に帰っているから、人ってどんなに家が危ないときでも、家に向かってしまう習性があると思うんです。危ないときには、家じゃないところに行くという習慣をつけておかないと、すごく怖いなと思いました。



マイカー水没の経験生かす

（名古屋市 60代 男性）

私は実を言うと、8年前の東海水害*のときに買ったばかりの新築の家が床下までつかったという、とんでもない経験があります。

私の家は6軒の建て売り住宅のひとつで、他のみなさんと同じ時期に入居したんですが、いつも雨が強く降り始めると、近くにある高い土手のところにご近所の車がずらっと並ぶんですよ。「何でなんだろう」と、新しく入った仲間同士で話はしていたんです。

ところが、当時雨がはげしく降ってきて、タイヤの下あたりまでだった水が、だんだんこう上がってくるわけですよ。どの段階で上の方に移せばいいんだろうって、みんなが迷っているうちに、もう抜き差ししなくなっちゃって、家は床下浸水になり、車も使いものにならなくなっていました。

だから今回は、これだけ雨が降ったら、どれぐらいの水が溜まるとか、いつごろ車を上に上げなきゃならないかがだいたい分かっていたので、大雨に関する情報をテレビやラジオなどで一生懸命集めて対応できました。

*東海水害：台風14号（平成12年）に伴い東海地方を襲った集中豪雨は、愛知県下に甚大な被害をもたらした。



バスタオルの防災ずきんでコミュニケーション

（名古屋市 70代 女性）

私たちは、地震対策として一人暮らしの方たちに、防災ずきんの作り方を教えてまわっています。仲間家で集会したり、商店街の婦人会の方たちを集めたり、教えてほしいと言われれば地域の集会所に出かけていたりして。

そのずきんは、簡単に言うと、どこの家にもあるバスタオルに、軍手や下着類を、しっかり縫いつけちゃうと取れないですから、しつけ糸で荒く縫いつけておき、そこにクッション代わりに也成了る尿取りパッド2つを入れてたたむというものです。で、軍手はポケット代わりにもなりますから、その中にお金だとか健康保険証の控えだとかを入れておくんです。

常備薬なんかは、時たま替えなきゃいけないから、外側へ縫いつけますし、中に入れるものはマスクやストッキングなど使う人が自由に選ぶことができます。最後にバスタオルにヒモをつけて縛るようにするんですけど、縛ったところに百円均一のお店で買った笛をぶら下げて、「何かあったらこの笛を吹いて知らせてね」って言って。みんなでおしゃべりしながら作るとお互いの気心も知れるし、地震への意識も高まるので一石二鳥ですね。



一日前プロジェクト みんなでやってみよう！

ー簡単な手順を紹介しますー

まず、過去の自然災害（地震、水害等）の中から対象を選ぶ



その災害の被災経験者や災害対応経験者に声をかける



みんなが集う場所と時間を設定する ※所用時間は約2時間



なごやかな雰囲気の中で、当時を思い出しながら、
体験したり感じたことを話し合ってもらおう ※話し手は、2人～4人が適当



「教訓」や「知恵」につながる部分を拾い出し、タイトルをつける



テープ起しなどを基に、拾い出した部分を「物語」にする

※物語は、300字～500字程度で、できるだけ語り口を残して編集
※物語の情景を表すイラストや写真等を添えると効果的



作成した「物語」を地域や職場のみんなに読んでもらう

